連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」

本シンポジウムの趣旨

連続シンポジウム発起人　鴇　﨑　敏　彦

学会の存在意義の一つに社会貢献があることは論を俟たない。そして、当学会が守備範囲としている諸分野の研究活動を社会に還元する有効な手段の一つに、その研究成果の英語教育への応用が挙げられることも、多くが認めるところだろう。そこで、最近の英語教育の動向に目を向けてみると、コミュニケーション能力が重要視されており、とにかく「慣れる」ことで英語力を育成しようとする傾向にあるように感じられる。もちろん、「慣れる」ことは大切であるし、英語をツールとして使えるようにならなければ、学習する意味がないのも当然である。

しかし、限られた時間の中で効率よく英語力を身に付けるためには、「慣れる」だけではなく、きちんと「理解」することも重要であることは間違いない。その「理解」を促す過程で、最新の研究成果はもちろんのこと、概論レベルの知識であっても、授業者の工夫次第で、学問的知見を活かすことは十分に可能であると考えている。本シンポジウムでは、「学問的知見を英語教育に活かす」というテーマのもと、各発表者が、各々の専門分野における英語教育に活かすことのできる学問的知見や、その知見を活かした教授法について取り上げる。

発題者 23

（to）不定詞、原形、語幹、語根

野　村　忠　央

多くの人は、生徒や学生、英語教員を含め、「不定詞、to 不定詞、原形、更に語幹、語根」を同じものだとみなしているが、本来は別物であるということを、古英語、サンスクリット語、ゴート語などの印欧語の動詞の活用から論ずる。結論は以下である：

（i）原形＝裸形は何も付かない形

（ii）不定詞は法助動詞や不定詞標識 to に後続する形だが、ゼロ語尾 φ がある

（iii）現代英語だけを見れば、動詞の語幹＝語根と考えて良いが、歴史的に考えると、原形にあたるのは語幹

（本発表は学会慫慂による連続シンポジウムの発表ということで、筆者の同名開拓社コラム（野村 2024）に基づく発表であることを予めご了承頂ければと存じます。）

研究発表要旨

「鯨の腹のなか」はあるか否か

國　分　潤　子

評論「鯨の腹のなかで」（“Inside the Whale”，1940 年）でジョージ・オーウェル（George Orwell）は、ヘンリー・ミラー（Henry Valentine Miller）の受動的な視点をクジラの腹の中にいる何もできないヨナを引き合いに出し、好意的に描いている。外界で何が起こっても影響を受けないクジラの腹のなかを「無責任の最終の局地」とオーウェルは述べ、ミラーの受

動的な態度を静観主義と評価している。一方、サルマン・ラシュディ（Sir Salman Rushdie）は静観主義を保守的な態度だとオーウェルを批判し、クジラなど存在しないと述べる。2 人の意見を踏まえ、クジラが登場する小説の主人公たちを見ていきたい。クジラが存在する世界に住む彼らは、クジラの腹のなかにいるか否かを考えたい。また人間がクジラに何を見ているか、クジラにどんな役割を背負わせているのかにも合わせて触れていきたい。

スープとスパイス：トルコ語翻訳版『不思議の国のアリス』における冒頭詩および作中詩の分析

藤　田　晃　代

近年、トルコ人研究者、翻訳者による英語文学のトルコ語訳が盛んに行われ、英語圏の文学がトルコ国内の一般読者にも広く紹介されるようになっている。本発表では古典として世界中で親しまれているルイス・キャロル（Lewis Carroll, 1832-1898）による『不思議の国のアリス』（*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865）のシリン・エティック（Şirin Etik）翻訳 *Alice Harikalar Diyarında* における冒頭詩をはじめ、作中詩「ロブスターのカドリール」（"The Lobster Quadrille"）および「ウミガメモドキの歌」（"Turtle Soup"）を中心に翻訳詩をそのリズムと詩形から分析する。翻訳版では膠着語に属するトルコ語の特性である比較的自由な語順を活かして原語のリズムを大きく損なわない工夫がみられる一方、中東および西アジアの詩にみられる hazaj meter を用いた現代トルコ語訳となっている点を明らかにする。さらに不思議の国の他の住人に比べてこれまであまり注目されていない料理番の役割について、スパイス入りのスープ作り、物語終盤の「タルト裁判」での彼女の証言まで原作と翻訳版からあらたな解釈を試みる。本発表では原詩とトルコ語訳を対訳で示すが、トルコ語版に意訳がある場合、意訳されたものを発表者が改めて和訳したものを示す。また、発表者の音読によるトルコ語の音とリズムも紹介したい。

「乾燥の 9 月」における歴史的な背景が作品に与えた影響

加　藤　良　浩

フォークナーの「乾燥の 9 月」は、1920 年代のアメリカ南部における黒人に対する人種問題をテーマとして扱った短編だが、そこでは、白人の中年女性にレイプされたと噂を立てられた無実の黒人が、白人の暴徒たちによってリンチにかけられる物語が描かれている。また、この短編と同時期に書かれた長編『8 月の光』でも、黒人との噂をたてられた主人公が白人優越主義者により惨殺されてしまうプロセスが語られている。両作品が同様の時代と場所に設定されていることを考えれば、これら二つの作品は、共通した歴史や風土を背景として起こっていると言えるが、とりわけ黒人に対する暴行が集団で行われる「乾燥の 9 月」は、その背景知識が作品を理解する上で有益であるように思われる。白人の集団による暴行という一人物の特異性では説明できない行為であるかぎり、それは歴史的に積み重ねられた、彼らが住む土地の風土をより反映していると見なすことができるからである。

本発表では、歴史的な背景が「乾燥の 9 月」にどのように影響を与えているかを検討するとともに、その影響が作品のテーマとどのように関わっているかについて考察してみること

にしたい。

「世代」か「民族」か？―聖書の仏語訳と『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』の間テクスト性

齋　藤　山　人

ジャン＝ジャック・ルソーが晩年に残した自伝的著作『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』（以下、『裁く』と略す）は、作家の狂気と妄想の産物として長らく解釈されてきた。2016年に出版されたクラシック・ガルニエ社版『全集』第18巻の『裁く』は、その最も新しい批評校訂版であり、ジュネーヴ草稿に基づくそれまでの校訂版と異なり、コンディヤック草稿に依拠している。編者であるジャン＝フランソワ・ペランが指摘するように、コンディヤック草稿は、これまで校訂版の底本として使用されてこなかったにもかかわらず、テクストが執筆される際のルソーの豊かな思考の痕跡をとどめている。本発表では、このクラシック・ガルニエ社版の成果に依拠しながら、『裁く』が聖書の仏語訳と結んでいる関係について指摘する。特に《 génération 》という語彙に注目することによって、ルソーが1760年代に執筆した『山からの手紙』と、『裁く』との間の関係についても考察する予定である。